
ひとつ屋根の下

はなもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとつ屋根の下

【Nコード】

N6047D

【作者名】

はなもも

【あらすじ】

なぜか同じ屋根の下で暮らす事になった未来と隼人。それぞれ別の恋をしながら、恋に落ちそうで落ちない微妙な関係。そんなふたりの物語です。

第1章：Prologue

ちつ、遅刻うゝ。

あいばみく
相羽未来はベッドから飛び起きた。

会社の始業開始時間に間に合わせる為には、七時半には出なきゃいけないのに、時計はすでに七時半を過ぎている。

慌てて服を着替えて、一階のリビングに駆け込むと、そこには椅子に座つてのんびりとコーヒーを飲んでいる香山隼人かやまはやくとがいた。

「ちよつと、起きてんなら起こしてよ！」

未来は冷蔵庫から牛乳を取り出すと、カップに注ぎ一気飲みをした。

「まったく、朝からうるせえヤツだな」

隼人は未来を一瞥しコーヒーを飲み干すと、立ち上がり未来を見下ろした。

高校三年生の隼人は百七十八センチの長身ですらりとした体格をしているが、百五十五センチしかない未来にとってはでかいヤツという印象しかない。

「お前なあ、二十四にもなつて高校生の俺に頼るなよ」

「なに言つてんのよ。あんたにはやさしさってもんがないの？」

未来はキッチンにあったロールパンを掴むと、玄関に急いだ。

「あつ、今日遅くなるから。今日の夕飯は昨日作った煮物を温めて食べて」

ヒールを履きながら未来が言うと、隼人は長身の体をリビングと廊下をつないでいる扉の柱に背を預けながら

「ふうん。デートなんだ」

「えっ……、ああ、まあね」

ニヤツと笑いながら言う隼人に未来は曖昧に答えながら玄関の扉を開けた。

「じゃ、いってきます」

玄関を出ると、駅まで走った。

まったく調子狂うなあ。

ニヤツと笑った時の隼人の顔は十七歳には見えず、妙に大人びていてドキツとしてしまう。

そもそも、未来と隼人は赤の他人だ。

いや、他人だった、一年半前では……。

それがどうしてひとつ屋根の下一緒に住む事になったのか……。

それは、今年の年明けの事だった。

第2章：突然の電話

お正月の賑やかさも一段落した、仕事始めの日。

定時で仕事を終えた未来は、アパートでのんびりとテレビを観ていると、携帯の着信音が鳴った。

着信者を確認すると・・・五月なつき・・・とある。

未来の四歳年上の姉だ。

通話ボタンを押すと、五月ののんびりした声が聞こえてくる。

「未来、元気してた？ お正月ぐらい家に遊びにければよかったのに」

家というのは五月の嫁ぎ先であり、未来の実家ではない。

五月と未来の両親は仕事でバンクーバーに居るため、三年前から五月と未来のふたりで日本で生活していたが、姉の五月が一年半前に外資系企業に勤める香山大輔と結婚した為、未来は念願のひとり暮らしを始めた。

「新婚さんの家にお邪魔しちゃ悪いし」

「あら、そんなこと気にしなくてもいいのに。大輔さんとならいつでもラブラブだから」

あつ、そつ。

「で、用件は何？」

「それがねえ、急に今年の春から大輔さんがシカゴに転勤する事になってしまったの」

「へえー、そうなんだ」

外資系企業に勤務している以上、海外への転勤は特に驚くことでもない。

「海外への転勤はあるだろうとは思ってたけど、こんなに早いとは大輔さんも思ってたなかったみたいで……。まあ、それはいいんだけど……」

なんか嫌な予感……。

姉さんが語尾を濁すような言い方をする時はたいてい、いいことじゃない。

「姉さん、何がしたいの？」

「うーん、心配事がひとつあってね……」

心配事……？

「隼人君のことなんだ」

隼人君？

香山隼人とは五月の旦那である香山大輔の高校二年の弟である。

香山家の両親は五年前に交通事故で亡くなり、それ以来兄弟ふたりで暮らしていたが、五月と結婚して今は三人で一緒に暮らしている。

「私達がシカゴに行っちゃうと、隼人君ひとりになっちゃうでしょ。まだ保護者が必要な年齢だし、かといって一緒に連れて行く訳にもいかないし……」

確かに高校生をひとりにしておくのは良くないだろうな。

「三年になれば、大学受験もあるし……。それでね、私達がシカゴに行っている間、未来と隼人君と一緒に住む事に決まったから」

「はあ？」

一緒に住む？

決まった？

「一体どうゆう事よ！」

舞は思わず声が大きくなった。

「だって、未成年の子をひとりにしておけないでしょ？ それで大輔さんと相談してそうゆうことにしたから」

したからって……。

「未来がそのアパートを出て香山家に引っ越して、隼人君と一緒に

住めばあんだってアパート代浮くし一石二鳥じゃない」

姉の話にすでに舞は言葉すら出てこない。

「あんたの安月給じゃ、ひとり暮らしも楽じゃないでしょ」

確かにそれを言われると反論出来ない……。

実際、就職して二年目の未来の給料じゃ生活していくだけでお給料のほとんどが消えていつていた。

「大家さんには三月末でそのアパートを出るって、もう言っておいたから」

「えっ！ もう言っちゃったの？」

「だって、そこは私名義で借りてるし」

三年前にアパートを借りる際、まだ大学生だった未来が借りる事ができるわけもなく、五月の名前で借りてそのままにしてある。

「じゃ、そうゆうことで。引っ越しの日にちが決まったら教えてね」

そう言うと一方的に電話は切れた。

「ちょ、ちょっと！ 姉さん！」

普段のんびり屋の五月だが、変な所で行動力がある。

そして、こうなった以上未来に拒否権はない。

ハアと未来は大きく溜息をついた。

何が楽しくて高校生のガキと一緒に住まなきゃいけないのよ！

未来は二回だけ会った事のある隼人を思い出していた。

一回目は結婚が決まって、相羽家家族と香山家兄弟との顔合わせの時。

二回目は結婚式の時。

どちらも、まともに話はしていない。

長身のスラリとした体型に眼鏡をかけてはいるが、女の子がほっておかないだろうなと思うほど整った顔をしていて、高校生のくせに妙にしっかりしていて愛想が良かったけ……。

たしか、有名進学校に通ってるって聞いたけど……。

今時、めずらしいくらい真面目そうな子だったな。

しかし、そんな未来の印象は引っ越して二日目でもろくも崩れた。

第3章：相手の正体

未来が香山家に引つ越した日の夕方。

五月、大輔、隼人そして未来の四人で夕食を共にした。

「未来ちゃんごめんね。変な事頼んじゃって」

大輔は未来のグラスにビールをつぎながら言った。

「いえ、とんでもないです。こちらこそ家賃もない上に生活費までみてもらえるなんてホントにいいんですか？」

「もちろん。無理な事お願いしたのはこっちなんだから、気にしないで」

未来は愛想笑いをしながら、大輔にビールをつぎ返した。

「俺が言うのも変だけど、隼人は真面目なヤツだから未来ちゃんに迷惑をかけるような事はないと思うから」

大輔は隼人を見ながら

「お前も家の事はちゃんと未来ちゃんの手伝いしろよ」

「大丈夫だよ。未来さん明日からよろしくね」

ニツコリと笑いながら、隼人は未来を見た。

隼人の丁寧な言葉使いにやわらかい物腰は、今時珍しいくらい真面目そうな感じだなあと未来は改めて思った。

この分なら、うまくやっていけそうな気がする。

「こちらこそよろしくね。隼人君」

未来はニツコリと笑って答えた。

次の日、未来は大輔の車で、姉夫婦と隼人を乗せ空港へとお見送りに行った。

「じゃ、未来、隼人君の事よろしくね」

「うん。姉さんも元気だね」

「隼人、未来ちゃんの迷惑にならないようにな」

「心配しなくても大丈夫だよ」

大輔と五月は手を振って搭乗口へと消えて行った。

そして、空港からの帰り道、信号待ちをしていると信じられないものが目に入った。

「ちっ、ちょっと！ あんた、何やってんのよ」

未来が見たものとは……。

タバコに今にも火を点けようとしていた隼人の姿だった。

慌ててタバコを奪うと、タバコより驚いたのが隼人の言葉使いだっ
た。

「なんだよ。返せよ」

姉さん達がいた時にはずっと丁寧な言葉でしゃべっていたのに、ま
るで人格が変わったかのようにぶっきらぼうに言った。

未来はまるで面をくらったかのような気分だったが、気を取直して
言った。

「返せよって、あんた高校生のくせして何言ってるの！」

「いいじゃん。別にタバコぐらいで目くじら立てなくても」

タバコぐらいって……。

「あんたね……」

「信号変わったぜ。ちゃんと前向いて運転しろよ」

未来が最後まで言い終わらないうちに隼人の言葉が被さった。

隼人の言葉に未来は慌てて前を向きアクセルを踏んだ。

「あんまり怒ると皺ふえるぜ」

からかうようなその言葉に未来はますます腹が立ってきた。

なんだコイツ、姉さん達がいた時の良い子ちゃんぶりは何処に行ったのよ！

「未来、今日俺バイトだから途中で降ろして。夕飯もいらないから
そして、たたみかけるように隼人は言った。

みつ、未来って……。

さっきまでは未来さんって言っていたのに……。

あまりの豹変ぶりにもはや未来は言葉すら出てこなかった。

そして、我に返った時にはすでに隼人を降ろした後だった。

未来は自分の部屋へと入ると、持っていた鞆をベッドに投げ付ける。

もう！ 信じらんない！

アイツ絶対二重人格だ！

なんだ、あの言葉使いと態度は！

未来は腹の虫が治まらず、ベッドの上に置いてあったクッションを
何度も叩いていた。

第4章：Dwarfs

隼人がショットバー“Dwarfs”^{ドワーフ}の扉を開けると

「おつ、隼人。今日はお兄さんの見送りだったんだろ、良かったのか？」

「はい。今行ってきた帰りです」

“Dwarfs”のマスター、^{やがみたかし}八神隆は店の開店準備をしながら言った。

ショットバー“Dwarfs”は隼人のバイト先である。

知り合いを介して知り合った隆に隼人が頼み込むようにして、バイトをさせてもらっている。

さすがに高校生の隼人を店に出す訳にはいけないので、隼人の仕事は開店準備と裏方担当だ。

法律で十八歳以下は二十二時以降仕事はできないので、それまでには必ず店を終る。

「お前、お義姉さんの妹と一緒に住む事になったんだろ」

隼人が制服に着替え、開店準備を手伝い始めると隆が聞いた。

隆の言葉に隼人は未来の事を思い出していた。

のんびりしたお義姉さんとは正反对で、行動的で底抜けに明るそうな印象だった。

アイツが同居を承諾しなければ、気楽にひとり暮らしが出来たのに。隼人はそんな風に思っていた。

そして、本来の性格を隠して良い子を演じて来た隼人にとって、大輔の海外転勤はそんな自分を家でも演じなくてもよくなると一抹の期待を持っていたのだが、未来の同居でもろくも崩れてしまったのだ。

そんな思いも知らずにニコニコ笑っている未来に苛立を感じ、つい本来の自分を出してしまっていた。

出してしまった後、隼人は開き直った。

どうせこの先一緒に暮らしていかなきゃいけないのなら、いつそのことそっちの方が楽かもしれないと。

そんな事を考えていると、店の扉が開いた。

「美香、お前店には来るなって言っただろ」

「ごめんなさい……。でも、お弁当作ってきたの。夕食に食べてもらおうと思って」

隆の言葉に、少しシュンとした感じで持っていた紙袋を差し出した。

なとりみか
名取美香二十歳は隆の恋人だ。

去年の大学のミスにも選ばれるほどの美人で、美香が隆に告白して付き合ったと聞いている。

「ああ、いつも悪いな」

不機嫌そうにしながらも隆は、美香から紙袋を受け取った。

「隼人君の分もあるから、良かったら一緒に食べて」

隆の機嫌を伺うようにして、美香はお店を出て行った。

「隼人、店開ける前に食ってしまおうぜ」

隼人と隆はカウンター席に座り、美香の作ったお弁当を食べ始めた。

「美香さんと最近うまくいってないんですか？」

「そう見えるか？」

隼人の質問に隆は浅く笑って答えた。

「そろそろ終わりにしようかとは思ってるよ」

「そうなんすか？」

「ああ、もう飽きた」

隆の言葉に隼人はムツとしたが、来るもの拒まずの隆は二股三股などはいつものことで、飽きれば捨てるといった感じの恋愛をしてい

た。

今も美香以外に付き合っている女が何人かいるのを隼人は知っている。

隆は隼人を一瞥すると、ニヤツと笑い

「美香を口説くなら今がチャンスだぜ。惚れてんだろ、アイツの事」

「べつ、別にそんなんじゃない……」

「無理すんなよ。お前が美香に惚れてることぐらいわかってるよ」

実際、隼人は美香に恋心を抱いていた。

もともと美香は“Dwarfs”の常連客だった。

隆を目当てに来ていたのを知っていた隼人は、自分から美香にモーションをかけるような事はしていない。

「近い内に別れるから、そんな時は慰めてやれよ」

「ホント、そんなんじゃないっすから」

隼人は自分が惚れている女の事を、まるで人ごとの様にいう隆に苛つきを覚えながらもやんわりと否定した。

第4章：Dwarfs（後書き）

今後の更新は2〜3日に1回のペースになると思います。

第5章：恋人

未来は会社の給湯室でお客様に出したコーヒークップを洗っていた。

未来は小さな自動車整備工場の総務部に勤めている。

総務部といっても五十過ぎのお局的存在の人と未来のふたりしかおらず、自然とお茶出し等の雑用は未来の仕事となっていた。

「未来」

名前を呼ばれ振り向くとすぐ隣りに村木浩市むらぎこういちが立っていた。

「村木さん」

村木と未来は恋人同士である。

百六十八センチと男性にしては低めの身長だが、優しそうな笑顔と話好き村木は誰がみても第一印象で嫌う人はいないだろう。

未来が勤めている会社に営業で頻繁にやってきているうちに村木にデートに誘われ、二十六歳と年齢が近かったせいもあり、話がよく合い八ヶ月程前から付き合い始めた。

小さな会社の為、よく出入りしている村木は基本的に社内を顔パスで歩いている。

「今日、予定大丈夫？」

「うん」

「じゃ、いつもの所で待ってるから」

ふたりが付き合っているのは会社には内緒にしている為、それだけを言くと村木は給湯室からでて行った。

未来の仕事は基本的に残業というものがない。

定時の時間になると未来は村木との待ち合わせ場所に向かった。

会社近くの公園、その側に村木の車が止まっている。

未来は助手席のドアのガラスをコンコンと叩き、扉を開け助手席に乗込んだ。

「ごめん、待った？」

「いや、そんなことはないよ」

村木は答えながらウィンカーを出し、車を発進させた。

イタリアンレストランで食事を済ませると、そのままホテルへと行く。

限られた時間で早急に事を済ませると、お互いシャワーを浴び着替えホテルを出る。

未来は嘆息をついた。

最近、いつもこんな感じだな……。

未来が隼人と一緒に暮らし始めて二ヶ月、未来が一人暮らしをしていた頃はよくアパートで一緒にいたが、アパートを出てからはもっぱらホテルへと行くのがいつものコースになっていた。

一人暮らしをしていた頃は、村木と一緒にのんびりする時間もあったが、ホテルではお互いゆっくりすることも出来ずに、やることだけやればさっさと部屋を出るといった感じだった。

別にそれに不満があるわけではないが、会って体を重ねているだけの関係になっていつているような気がしているのも事実だ。

家の前まで着くと、村木は車を止め美樹の方を向いた。

「未来さあ」

「ん？」

「ホントに大丈夫なのか？」

「何が？」

村木の質問の意味が分からず、聞き返した。

「お姉さんの結婚相手の弟っていつても、しょせんは赤の他人だろ。それに、高校生とはいえもう体はりっぱな男だぞ」

未来はようやく村木の言いたい事を理解した。

「ああ、それは大丈夫。向こうはあたしの事なんて家政婦ぐらいにしか思っていないから」

未来は隼人と暮らし始めたこの二ヶ月を思い出していた。

隼人は顔を合わせると何かと未来につつかかってくる感じが、何のバイトをしているのか知らないが、帰りも遅く一緒に食事をするにとすら数回しかなかった。

最初の頃は、高校生のくせに帰りが遅い事を注意したりもしたが、結局は言い返されてしまうので、もはや未来は言う事すらあきらめた。

いや、それどころか年齢のわりにすごくしつかりしていて、最近では未来の方が説教されることすらあるのだ。

一応お義兄さんからは生活費を毎月もらっているから、隼人が嫌なヤツだとしても家事だけはしつかりこなしている。

どんなに嫌でも、アパートを引き払ってしまった以上ここを出る訳にはいいのだ。

「そうは言っても、一応は用心しろよ」

「うん」

未来は一応返事をしたものも、内心アイツとは死んでも男と女の関係にはならないだろうなという変な確信めいたものがあつた。

村木は未来をの肩を抱き引き寄せ、軽く唇を重ねた。

唇が離れると未来はおやすみを言って車を降り、村木の車が去って行くのを見送った。

家に入りリビングへ行くと、隼人がソファに座ってテレビを観ていた。

「ただいま」

未来の言葉に返答することなく隼人は未来の方を振り向いた。

その顔はいたって不機嫌そうだ。

未来は隼人を一瞥すると、キッチンへと向かう。

昨日作り置きして置いた夕飯は食べたのか、使った食器類はちゃんと洗ってあった。

性格は悪いが、こうゆう所は几帳面らしい。

未来は食器棚からコップを取り出し、冷蔵庫に冷やしてあるお茶を注いだ。

隼人が立ち上がり、キッチンとリビングをつなぐ通り道まで来ると足を止めた。

「お前さあ、何時だと思ってるんだよ」

隼人の言葉に未来はチラッと時計に目をやる。

十一時を少し回った頃だった。

遅く帰ってきたとはいえ、子供でもあるまいし高校生のガキに言われる時間ではない。

「男といちゃつくのはいいけど、家の前でキスしてんじゃねえよ」

隼人の言葉に未来は、飲みかけたお茶を吹き出す所だった。

「…………えっ、…………あんた、見てたの？」

焦ったせいか声が大きくなった。

「あのなあ…………」

隼人は苛立ったように腕を組んだ。

「こんな時間に静かな住宅街でアイドリングで車を止めてりゃ、不審に思っただけくらい確認するだろ」

あっ…………。

「近所の目もあるんだから、少しは考えて行動しろ」

未来は小さく溜息を吐いた。

まさか、見られてたとは…………。

これじゃ、どっちが保護者かわかんないなあ。

隼人はそれだけ言うと、リビングの扉の方へ歩いて行っただが、扉のノブに手をかけると未来の方を振り返った。

「お前さ……。いや……。いいや」

何か言いかけて止めた隼人は、そのままリビングを出て行こうとした。

「ちょっと、言いかけてやめないでよ。気になるじゃない」

未来の言葉に隼人は顔だけ振り向き、ジッと未来の顔を見た。

「なっ、何よ」

いつもより真剣な眼差しで見られ、未来は戸惑った。

「あの男の事、本気で好きなの？」

「えっ、そっ、そりゃ……」

思ってもみない質問をされ面をくらった。

「ふうん……。……なら、あいつの行動ちゃんと見張っておくんだな」

あいつの行動って……。

隼人の言っている言葉の意味が分からず、臉を瞬かせていると

「一応、忠告したからからな」

そして、隼人はリビングを出て行った。

一体、なんだっただろう……。

隼人のいなくなったリビングで未来は立ちつくしていた。

第6章：揺れ動く心

次の日、未来が家に帰るといつもはバイトで遅い隼人がめずらしく先に帰ってきているようだった。

リビングの扉を開け中に入ると、雑誌を読んでいたのかソファに座ったまま上半身をソファの背に預け寝ていた。

買い物袋と自分の鞆を置き、未来はそつと近づいたが起きる気配がない。

未来は隼人の寝顔を見ながら思った。

それにしても、綺麗な顔立ちをしてるなあ。

モデルとかやってもきつと売れるんじゃないかなとか思ってしまう。

いつそのこと、勝手に何処かのタレント事務所にでも写真と履歴書送ろうかしら。

そんな事を考えていると、ふと隼人がしている眼鏡が気になった。

眼鏡しながら寝るのって邪魔じゃないのかな。

両目とも一・五あり、未来は一度も眼鏡はかけた事がないだけに、変な事が気になってしまった。

未来は隼人の眼鏡に手をかけ取ろうとしたその瞬間

「なにしてんの？」

隼人の瞼が開きいきなり手首を掴まれた。

「なにつて……、その……」

未来は焦った。

まさか、眼鏡を取ろうとしていたとは言えない……。

隼人は未来の手首を持ったまま、ジッとこちらを見ている。

こんな風にまともに目を合わせたのは初めてかも……。

そう思うと急に心臓がドキドキしてきた。

「……こんな所で寝てたら、……風邪……引くかなと思って……、
起こそう……かと……」

未来は隼人から目を逸らし言い訳をしながら、最後の方の言葉がフ
エイドアウトしていく。

隼人はニヤツと笑い

「そう……、俺はまた寝込みを襲われるのかと思った」

「ばっ……、そんな訳ないでしょ！」

未来は隼人に掴まれている腕を振りほどきながら言った。

「それより、腹減った」

すでに隼人の意識は食欲の方に移行したようだ。

「……すぐ、用意するから……」

未来は急いでキッチンへと向かった。

まさかあのタイミングで起きるとは……。

あんな事しなきゃ良かった。

だいたい、高校生相手に何ドキドキしてんだろう。

出来るだけ平静を装いながら夕食の支度をしていたが、自分が思っているより冷静さを失っていたようで

「痛っ！」

包丁で手を切ってしまった。

すぐに水で傷口を流したが大量の血が止まる気配がない。

どうしよう……。

「どんくせえなあ」

気がつくとな隣に隼人が立っていた。

「いったいどんだけ深く切ったんだよ」

隼人は未来の傷口を見ると、どこからか輪ゴムを持ってきて切った傷口近くを輪ゴムできつく止め始めた。

その間、ずっと隼人の手が未来の手に触れていて、先程の事もあり未来はまたしても心臓がドキドキし始める。

隼人が輪ゴムを止め終わると大量に出ていた血が止まり、その上からガーゼを当ててくれた。

「完全に血が止まるまで輪ゴム取るなよ」

「あり……がとう……」

未来はまともに隼人の顔を見る事ができず、下を向いたままお礼を言った。

「何、作ってたの？」

「あつ……、シチュー……」

どうしよう……。

血が止まるまで料理は出来そうもないな、そんな事を思っていると隼人は包丁で野菜を切り出した。

「何……、してるの？」

「何って、その手じゃ料理は無理だろ。今日は俺が作るから座ってな」

「えっ！ 料理出来るの？」

驚いて隼人に聞くと

「兄貴が結婚するまではふたりだったから、簡単なものなら作れる」

そうなんだ……。

この家に来てから、ずっと未来がご飯を作っていたから、まさか隼人が料理が出来るとは思ってもみなかった。

未来はその場に立ったまま、隼人が材料の皮を剥いたり切ったりしているのを見ていた。

器用だなあ、そんな事を思っていると隼人が未来の方を振り向き目が合い、それだけでまたドキッとしてしまう。

「邪魔」

「えっ？」

「だから、邪魔！ さっさと向こうに行けよ」

隼人に苛ついた様に言われ、未来は追い出される様にチッキンから出た。

未来はダイニングテーブルの椅子に座ると、小さく溜息をついた。

ああ、今日のあたしはおかしい！

隼人と目が合っただけでドキドキするなんて……。

未来が自己嫌悪に浸っている間に、隼人はシチューを作り終えテーブルに並べてくれた。

テーブルの上にはいつの間に作ったのかサラダも置いてあった。

一緒に夕食を食べるが、隼人はしゃべる事なく黙々と食べている。

今までもそうだったが、ふたりで食べていてまったく会話がなかったってどうなんだろう……。

そう思った未来は昨日気になっていた事を隼人に聞いた。

「あのさ……、昨日言ってた事なんだけど、あいつの行動ちゃんと見張ってどうゆう意味？」

「そのまま意味だよ」

隼人は食べる手を止める事なくすでに二杯目を食べている。

「そのままって……」

「お前、鈍すぎ」

隼人は未来を一瞥しそれだけを言うと、再び食べ始める。

鈍すぎて……。

あんたがハッキリ言わないのがいけないんじゃない！

そう思ったが、未来は言うのを止めた。

ハッキリ言う気のない隼人に何を言ってもきつと無駄なような気がしたからだ。

ふたりとも無言のまま未来が食べ終わると

「そろそろ外してもいいんじゃないの？」

そう言つて隼人は未来の切った方の手を診ようとした時、とっさに手を引いてしまった。

まずい、そう思い未来は慌てていい訳をする。

「……大丈夫、……後は自分で出来るから」

一瞬隼人は怪訝そうな顔をしたが

「そつ、血が止まってたらあとは絆創膏で大丈夫だと思うから」

それだけを言うと、食べ終わった食器を全て洗って自分の部屋へと戻っていった。

……変に、……思ったよね。

未来は自分の頭を抱え込んだ。

何を過剰反応してるんだろう……。

第7章：真実

土曜日の午後。

未来は高校時代の友人、寺内渚とショッピングに行く約束をしている為、待ち合わせ場所であるファーストフード店の窓際の客席に座りコーヒーを飲んでいた。

聞き慣れた携帯の着信音に気づき確認をすると・・・寺内渚・・・とあり、通話ボタンを押す。

「未来、ごめん。今日さ、急に彼氏が部屋に来ちゃって……」

「仲直りしたの？」

渚はつい最近彼氏の浮気が原因で大喧嘩したらしく、今日はその鬱憤をはらすためショッピングに行こうと渚の方から誘ってきたのだ。

「……うん。今日の朝電話があって、その時に別れるって言ったらその足で部屋に押し掛けてきて、泣いて謝られちゃってさ……。で、今一緒にいるんだけど……」

「そっか、わかった。いいよ」

「ごめん。今日の埋め合わせは今度するから、ホントごめんね」

未来は携帯を切るとコーヒーを一口飲んだ。

あんなに怒ってたのによく仲直りできたよなあ。

あたしだったら浮気なんてされたらきつと許せないと思う。

頼杖をつきながら窓の外を眺めていると、遠目だったがふと見慣れた顔が目に入った。

村木さん……？

未来が居るファーストフード店と反対側の歩道を村木が歩いていた。

そして村木の横には……。

お嬢様風の綺麗な女性が村木の腕を組んで歩いている。

えっ！

誰……？

未来は考えるより先にお店を出ていた。

今日は休日出勤だと言っていたのに……。

村木の服装はスーツ姿ではなく、ラフな普段着だった。

どうゆうこと？

まるで、恋人同士のように寄り添って歩いていた。

未来は横断歩道を渡ると、村木の後ろ姿を見つけ後を付けた。

あたしに嘘をついてまで一緒にいる女性は誰？

未来の脳裏には浮気の二文字がよぎった。

まさか、村木さんにかぎって……。

その思いを必死で打ち消そうとしたが、目の前を歩いているふたりは誰の目から見てもカップルにしか見えない。

一体、何処に行くんだろう。

後を付けたところでいい結果が待っているとは思えなかったが、それでも見てしまった以上無かった事にはできない。

しばらくすると、村木と女はホテルへと入っていく。

未来もその後に残きホテルの自動ドアをくぐると、村木と女はロビ―を横切りその奥にあるお店へと入って行こうとしていた。

お店のショーウィンドーにはウェディングドレスが飾っており、ガラスには『ブライダルフェア』と書いた垂れ幕がかかっていた。

それを見た瞬間、未来は無意識のうちに村木達の方へ走り出していた。

「村木さん！」

名前を呼ばれて振り向いた村木は驚いた様に未来を見た。

村木はなぜ未来がここにいいのかわからないといった感じで言葉に

詰まっている。

その様子を見ていた村木の隣にいた女が口を開いた。

「浩市さん、お知り合い？」

「……………あつ、ああ……………」

村木はハッと我に返ったように呟いた。

なんなの、その曖昧な返事は……………。

なんで、ハッキリと恋人だと言ってくれないの？

その人は誰？

相手に知り合いと聞かれて否定しないって事は……………。

その時、未来は悟った。

ああ、そうか、浮気相手は村木の隣にいる女ではなく、未来の方なのだ。

未来はキッと村木を睨むと

「どうも、お邪魔しました！」

かなりキツイ言い方をして踵を返し、自動ドアを通りすぎると未来は走り出していた。

遠くの方で未来の名前を呼ぶ声がした気がしたが、振り返る事はしなかった。

第8章：やけ酒

未来は家のリビングのソファでお酒を飲んでいた。

目の前にはテレビがついていたが、視覚の寂しさを紛らわす程度にしか見ていない。

ホテルを出た後、未来は大量にお酒を買い込みやけ酒を飲んでいる。

あんな場面に遭遇したんだもの、飲まなきゃやってらんない。

ブライダルフェアと一緒に行く間柄だと、きっと結婚の約束でもしているのだろう。

なにがブライダルフェアよっ！

未来はソファに置いてあるクッションを拳でおもいつき叩いた。

あの時、村木の頬を一発撲ってやりたかったし、問いつめてやりたい気持ちで一杯だったが、あえてそれをグツと堪えた。

あの場でそんな事をすれば、きっと惨めな思いをするのは未来の方だと思っただけだ。

それは未来のプライドが許さなかったし、なにより二股をかけられていたことに今まで気づかなかった事が情けなかった。

あまりの情けなさに涙すら出てこない。

とその時、リビングの扉が開き隼人が入ってきた。

「おつかえりい」

今まで聞いた事のない、明るい声の未来に隼人は驚いていたが、未来の周りに置いてある缶ビール5本と焼酎の瓶を見て明らかに嫌そうな顔をしている。

「何やってんだよ、こんな時間から」

確かに夕方の六時にかなりの酔っぱらいになっていれば、こんな時間からと言われても仕方ない。

「今日のお、隼人君の夕飯はあ、そこに置いてあるう、総菜ねえ」

こんな時にご飯なんて作りたくなかった未来は、お酒を買う時にスーパーで総菜をいくつか買ってテーブルに置いていた。

まったく気にせず明るく言う未来に隼人は冷ややかな眼差しを送ると、自分で飲み物を用意し、ダイニングテーブルの椅子に座って黙って総菜を食べ始めた。

その様子を見ていた未来はお酒を一口飲み、先程とは違って真剣な顔をして隼人に聞いた。

「ねえ、あんたさあ、知ってたの？」

「何が？」

隼人はこちらを見る事なく言った。

「村木さんに他に女が居るってこと」

未来の言葉に隼人は一瞬手を止めこちらを見たが、すぐに残っていた夕飯を食べ始めた。

「今日見かけたんだ、村木さんが他の女と一緒に居るところ」

未来はグラスの中のお酒を眺めながら言った。

隼人は夕飯を食べ終えたのか未来の横に座ると、持っていたグラスに焼酎のお茶割りを作り

「今日は付き合ってやるよ」

と言って飲み始めた。

へえ、優しい所もあるじゃんと思ったが……。

ん？

待てよ。

「ちょっと！ 付き合ってやるってあんたまだ未成年じゃない！」

隼人のグラスを奪おうとしたが、酔っ払っている未来には空振に終わった。

「堅いこと言うなよ。せっかく付き合ってやるって言ってんだから」

隼人は未来の頭にポンと手を置くと

「失恋した時は誰かに愚痴るのが一番だろ」

そっけなく言った隼人だが、未来の頭の上に置かれた手は不思議と暖かく感じた。

隼人相手にそんなふうにしてしまった未来は、これじゃほんとにどっちが年下なのかわからないよなあと思いながら、ふとさっきの質問を思い出した。

「そっといえば、さっきの質問にまだ答えてもらってない」

何の話だったか覚えていないかのように隼人は未来を見た。

「なんであんたが村木さんの事知ってるの？」

その質問に思い出したかのようにああと呟いた。

「俺がバイトしている店の常連客なんだ。たまにお嬢様風の女を連れて来てたから」

そうだったんだ……。

そっといえば村木さんと一緒にいる時はあまり外を出歩かずに、アパートに居ることが多かった気がする。

今思えばひとり暮らしをしているあたしって、浮気相手には都合が良かったのかもしれないな。

「ねえ、あんたって何のバイトしてるの？」

「ん？ 教えない」

隼人は目の前にあるテレビを観ながら言った。

「前から思ってたんだけどさあ、なんであんたってそんなにあたしに冷たいワケ？」

その言葉に未来はいつもなら絡むことなく会話を諦めるのだが、酔っているせいか言い返した。

近所のおばさん連中には驚く程の笑顔で挨拶しているくせに。

「お前って、酔うと絡むタイプなんだな」

隼人はお酒を飲みながら苦笑している。

「何がおかしいのよ！」

「いや、失恋した割には元気だなと思って」

そっ、そうだった……。

なんか隼人と一緒に居ると調子狂うよなあ。

「そうゆうけど、けっこうショック受けてるんだよ。しかも浮気相手はあたしの方だったんだから」

未来は小さく溜息をついた。

「バカだよ。ハケ月も一緒にいて気づかないなんてさ」

「なら、もう少ししおらしく泣いてみれば？」

「じゃ、泣いたらあたしに冷たいあんたでも、抱きしめて慰めてくれるとでも言うの？」

冗談ぽく言った未来に、隼人はいつもは見せない真剣な眼差しを見せ「」希望ならそうしてやるよ」

そついうと隼人は未来の肩を抱き寄せ、自分の胸の中に抱きしめた。未来は隼人の行動に驚いたが、力強い隼人の腕を振りほどく事が出来なかった。

「こんなやけ酒飲んでるなんて、いつもバカみたいに元気なお前らしくない。泣きたいなら好きなだけ泣けよ」

酔っていたせいか、そんな隼人の優しい言葉に未来の心の枷が外れ、いつのまにか涙が頬を伝っていた。

どれぐらい泣いていたのだろうか、その間ずっと隼人は未来を抱きしめていてくれた。

第9章：告白

隼人は“Dwarfs”で開店準備をしながら、未来の事を考えていた。

なぜ、あんな事をしたのか……。

やけ酒を飲んでいた未来に付き合うように飲んでいたが、あんな風に抱きしめるような事までした自分に驚いていた。

未来に村木の事で忠告したのもそうだ。

いつもなら他人の恋愛なんかに興味などないし、首を突っ込む気などさらさらない。

二股をかけられてるなんて、男を見る目のない方が悪いと隼人は思っていたし、普段未来の事を煩わしいとしか思っていなかったが、あの時だけは優しく抱きしめてやりたい気分になったのだ。

そんな自分の行動に理由を見つけないでいた。

酒を飲んだせいかなと考えていると、店の扉が開き美香が入ってきた。

「隆さんいるかな」

美香は辺りを見渡しながら言った。

「隆さんなら今、店の裏にいますよ」

「そう、ありがとう」

それだけを言うと美香は店を出ていった。

しばらくして隆が店に入ってくると、隼人の肩をポンと叩き

「まだ、店の裏にいるぜ。行ってやれよ」

隼人は促されるように店の裏に行くと、そこでは美香が下を向いて泣いていた。

「……美香さん」

隼人が遠慮がちに声をかけると美香はゆっくりと顔を上げた。

「……振られちゃた……」

声を掛けたのが隼人だとわかると、小さく微笑みながら言った。

その笑顔はとても切なげで、隼人は思わず美香を抱きしめた。

「は、隼人君……?」

「俺じゃ、ダメですか?」

「えっ……?」

「俺、ずっと美香さんの事好きでした」

隼人の思いがけない告白に美香は驚いて言葉が出ない。

「俺じゃ、隆さんの代わりにはなれないですか？」

「……隼人君……」

美香はそつと隼人の胸を押すと、隼人を見上げたその顔はどうして
いいかわからないという顔をしている。

「隼人君を隆さんの代わりになんて出来ないよ。それに、そんなす
ぐに隆さんの事忘れられる訳じゃないし……」

「俺は、それでもかまいません。美香さんが隆さんの事を忘れられ
るまで待ちますから。俺が側にいたら、迷惑ですか？」

隼人の真剣な態度に美香は笑って答えた。

「ありがとう」

未来は夕食の用意をしていた。

やけ酒を飲んだ日から未来は隼人を見る目が少し変わっていた。

嫌みしか言わないヤツだと思っていただけ、意外と優しい所もある
んだな。

まさか、泣いている間ずっと抱きしめていてくれるなんて思わなか

った。

今までが冷たい態度だっただけに、その分隼人の優しさが心に染みていた。

夕食を作り終えた頃に隼人が帰って来た。

「おかえり、ちょうど今ご飯が出来た所だから一緒に食べるでしょ？」

「ああ、ありがとう」

隼人がとても機嫌良く返事をしたのに驚いて、未来は隼人を見た。

「なんか、ご機嫌だね。いいことでもあったの？」

夕食をテーブルにセッティングしながら聞くと

「まあね」

ホントにどうしたんだろう。

一緒に暮らし始めてこんなに機嫌のいい隼人を見たのは初めてだった。

夕食を食べている間もずっと隼人は機嫌が良く、機嫌が良すぎて気持ち悪いなあとさえ思えてきた。

「よっぽどいいことがあったんだ。もしかして……、彼女ができたとか!」

ほんの冗談のつもりで言ったのだが

「まあ、そんなところ」

隼人は言葉少なげだったがあきらかに嬉しそうに答えた。

「あつ……、そつ、そうなんだ……」

隼人の答えに未来はなぜか動揺してしまっている。

こんなにカッコいいんだもん、彼女がいないほうが不思議だよね……。

何だろう、この晴れない気持ちには……。

彼女が出来たということに、なんとなく寂しさみたいなものが込み上げてきた。

その後は、結局いつものように沈黙のまま夕食を終えた。

第10章：偽りの恋人

未来は家の前まで来ると一台の車が止まっていた。

車の横を通り過ぎようとした時、運転席から男性が降りてきた。

村木さん……。

「未来」

未来の名前を呼びながら近付いてきた村木を、未来はキッと睨んだ。
ホテルでの一件以来、村木と会うのは初めてだ。

「なにか、ご用ですか？」

「……悪かったな。騙すつもりじゃなかったんだ」

村木は少し俯きがちに言った。

「未来と付き合い始めた時、里枝とはうまくいってなくて会ってなかったんだ」

里枝ってあのお嬢様風の女性のことかな。

「少し前に道で偶然会って……」

「だからって、二股をかけていいわけじゃないでしょ」

「未来……」

「あたし、これ以上村木さんと話す事ないから」

未来が玄関の方に歩き出すと、村木は未来の手首を掴んだ。

「待ってくれ未来。俺、まだ未来の事……」

「離して！」

捕まれた腕を振りほどこうとしたが、強く握られて振りほどく事が出来なかった。

「いいかげんにしろよ、オッサン！」

急に声がして、未来と村木は振り返った。

振り返った先には隼人が立っていた。

「人ん家の前で何やってんだよ」

隼人は歩き出すと、未来の隣に立った。

「なんだよ、お前には関係ないだろ！」

急に現れた隼人に村木はムツとした様子だ。

「関係ない事ないね。俺達、付き合ってるから」

そう言うと、隼人は未来の肩を抱いて自分の方に引き寄せた。

隼人の行動と言葉に未来は驚いて隼人を見たが、隼人は真つすぐ村木の方を見据えている。

そして、場違いにも隼人に肩を抱かれドキツとしている自分に気がつく。

なんだろう、隼人の手が置かれている肩が熱く感じる。

「付き合ってるって……、未来、お前……」

村木は驚いて未来を見た。

未来のその言葉にハツと我に返ったが、村木の質問に未来も答えられないし、未来の方が聞きたいくらいだ。

一体、どこをどうしたら隼人と付き合ってるって話になるんだろうか……。

「勘違いするなよ。未来が二股かけてたわけじゃない。あんたが他の女と一緒に居る所を見た日に、俺が慰めてやったんだよ。男と女がひとつ屋根の下にいれば……、それ以上は言わなくてもわかるだろ」

村木は困惑した顔をしながら未来を見ている。

「未来……、本当なのか……」

もちろん隼人と未来が男と女の関係になっているわけではない。

村木に問われ未来はどうしようかと思っただが、隼人が自分に助け舟を出してくれているのだろっ。

せっかくの隼人の気持ちを無駄にするわけにはいかない。

「ええ……、本当よ」

「そうゆうことだから、二度と未来に手を出さないでくれ」

隼人は未来の肩を抱いたまま家の中へと入った。

玄関の鍵を閉めると隼人は肩に置いていた手を下ろし未来を見下ろした。

未来はまだ心臓がドキドキしている。

「お前、隙あり過ぎ」

「そんな事言っただって、勝手に家に来てたんだからしょうがないでしょ」

未来は隼人に助けてもらった事も忘れて、未来は隼人の方を向いて言い返した。

「お前に隙があるからあんな男にしつこくつきまとわれるんだよ」

「しつこくって、あれ以来会ったのは今日が初めてで……」

「そつゆう問題じゃないだろ！」

なぜか隼人は苛立っているように見えた。

「そんなに怒らなくなたっていいじゃない」

「別に怒ってねえーよ!」

「それが怒ってるっていうの!」

だんだん言い合いになってきている事に未来も隼人も気づいたのか、そこで言葉が止まりお互い目線を逸らした。

しばらくの沈黙の中、未来はまだ隼人にお礼を言っていなかった事に気づいた。

あの時、隼人に助けてもらったのには変わらない。

お礼ぐらい言っておいた方がいいよね。

「……ありがとう」

思いがけない言葉に隼人は未来を見た。

「まだ……、助けてもらったお礼、言っていなかったでしょ」

未来は隼人と目線を合わせずに言った。

隼人はハァーと息をはいた。

「これから、もっと気をつけろよ」

「……うん」

隼人はそれだけを言うと、玄関を上がり自室へと戻っていった。

それにしても、なぜあんなに苛ついていたんだろう……。

家の前であんな事があって、近所迷惑だと思ったからだろうか……。

未来は隼人の行動がいまいち理解できないでいた。

第11章：憧れと好き

日曜の夕方、隼人はリビングでコーヒーを飲んでいると、玄関のチャイムが鳴った。

ちょうどリビングの扉を開け、入ってこようとしていた未来が玄関に向かった。

玄関を開ける音がした後、しばらくして未来の大きな声が聞こえてきた。

「隼人、お客さん！」

未来の声はよく通るせいか、少し大きめの声をだせば家中に響き渡る。

俺に客？

誰だろうと思ったが、家にまでわざわざ訪ねてくるのなら、親友の木戸ぐらいかなと思いきや椅子から立ち上がると、もう一度未来の声が聞こえた。

「隼人！」

「うるせえな、そんな大声出さなくても聞こえてるっつーの」

不機嫌そうに言いながら玄関に出ると、そこに居たのは美香だった。

「美香さん」

「ごめんね、連絡もなく突然訪ねてきて」

美香は隼人を見ると申し訳なさそうに言った。

「それはいいですけど、どうしたんですか？」

隼人は美香が隆に振られてから何度かデートをしていたが、美香が家に来たのは初めてだった。

連絡するのはほとんど隼人の方からだった為、突然美香が家に訪ねてきた事に隼人は驚いていた。

「少し、出れるかな」

「もちろん、いいですよ」

隼人はそのまま靴を履き玄関を美香と一緒に出た。

「ちょっと、歩かない？」

隼人は美香と肩を並べて歩き始めた。

「今日はどうしたんですか？」

美香はしばらく黙って下を向きながら歩いていたが、意を決したように言った。

「私……、やっぱり隼人君とは付き合えない」

隼人は驚いて立ち止まった。

「……………どうして……………ですか？ 俺じゃ……………、隆さんの代わりにはならないってことですか？」

「ううん。そんなんじゃないの」

美香は首を横に振った。

「なら、どうしてですか？」

「やっぱり、隼人君に隆さんの代わりをさせるなんて出来ない」

「俺はそれでも……………」

「ううん、ダメよ」

隼人の言葉を美香は遮った。

「そもそも隆さんの代わりなんて誰にも出来ないから」

「……………」

「それに……………、隼人君は私より他の人を見ているような気がするから……………」

他の人……………？

隼人は美香の言っている意味がわからなかった。

「俺は、ずっと美香さんの事を見てきました」

美香はゆっくりと隼人に笑いかけた。

「隼人君、憧れと好きは違うんだよ」

憧れと好き……？

「隼人君はね、私に憧れていただけ。それは、好きという感情にと
ても似ているものだから勘違いしやすいのね」

「……………」

「隼人君は私と一緒に居てもずっと私に敬語での話し方を崩さない
でしょ。それって、一歩下がって私の事を見てるってことだよ」

美香は再び歩き出した。

隼人もそれを追うように歩き始める。

「だから、さつきは驚いちゃった。あんなふうに年相応の喋り方す
る相手がいるなんて」

「あれは……………」

隼人は気まずそうに頭を掻いた。

「それとね、私カナダに留学する事にしたの」

隼人は驚いて美香をみた。

「留学……ですか？」

「ずっとね、行きたいって気持ちはあったんだけど、隆さんと離れたくなくて先延ばしにしてたんだ。でも、隆さんに振られちゃったし、いい機会だから思い切って行くことにした」

美香は立ち止まって、隼人を見た。

気が付くと駅に着いていた。

「隼人君が好きだって言ってくれて、私うれしかった。ありがとう」

「美香さん、俺……」

美香は優しく微笑むと、隼人にそっと近づき隼人の頬にキスをした。

「ちゃんと自分の気持ちに気付いてあげないと、大切な人を誰かにとられてしまってからでは遅いんだよ」

そう言うと美香は駅の改札口へと去って行った。

隼人は美香が去った後、しばらくその場で佇んでいた。

大切な人……。

その言葉に隼人の脳裏に未来の顔が浮かんだが、隼人はすぐさま顔を横に振った。

アイツの訳ない。

しかし、そう言い切れない感情が何処かにあることを隼人は薄々感じてはいた。

わざとそれに目を向けないようにしていただけではなかっただろうか……。

未来が村木と他の女が一緒にいる所をみかけてやけ酒を飲んでいた時、思わず抱き締めていたし、数日前に家の前で未来が村木といる所を目撃した時、いいよのない苛立ちがあったのは確かだった。

俺が好きだったのは美香さんじゃなかったのか？

『憧れと好きは違うんだよ』

憧れと好きか……。

大学でミスに選ばれるほどの美貌を持ちながらも、まったく鼻に掛けることもなく、誰にでも優しい美香は誰から見ても憧れの存在だった。

そして自分も憧れていた……。

隼人はなんとも言えない気持ちのまま家へと帰った。

第12章：気づいた気持ち

未来は夕食を作りながら、さっき隼人を訪ねてきた女性を思い出していた。

あの人が隼人の彼女なんだろうか。

大学生ぐらいに見えたけど、綺麗な人だったな。

今日はふたりで夕食を食べて帰ってくるのかな。

隼人の分、作っても無駄になっちゃうかも。

未来は小さく溜息をついた。

あたしは何を残念に思っているんだろう。

せっかく作った夕食が無駄になる事？

それとも……。

ここ数日、未来は隼人への気持ちになんとも言えない気分でした。

いや、わかっていてわざと自分の気持ちに目を逸らしていたし、認めたくなかった。

しかし、今日訪ねてきたあの女性を見て、いやでも自分の気持ちを再確認させられた。

あたし隼人の事……。

こんな気持ち隼人に知れたら、何を言われるかわかったもんじゃない。

未来は出来上がった夕食を見ながら、もう一度溜息をついた。

待っていてもきつと帰ってこないだろうな。

しかたなく未来はひとりで食べようと用意始めた時、玄関の開く音がして、
少ししてからリビングに隼人が入ってきた。

「ただいま」

まさかこんなに早く帰ってくると思っていなかった未来は驚いて隼人を見た。

「なにバカみたいに突っ立てるんだよ」

隼人を見たまま動かなくなった未来を見て隼人は言った。

「え、あ……、ご飯どうする？」

未来は慌てて取り繕うように言った。

隼人は未来の態度に怪訝そうな顔をしたが

「食べるよ」

それだけを言って、未来が用意しかけていた夕食の準備を始めた。

ふたりで食べる夕食はやはり沈黙だった。

夕食を食べ終わると隼人は自室に戻り、未来はお風呂に入った後、リビングのソファでいつものようにビールを飲みながらテレビを観ていたが、頭には入ってきていない。

しばらくすると、リビングの扉が開き隼人が入ってきた。

お風呂に入ったのだろう、髪が濡れていていつもより艶やかに見え、それだけで動揺している自分に未来は驚いた。

あたし、いつのまにこんなに好きになってしまったんだろうか。

そんな事を思っていると、ビール缶を持った隼人が未来の隣に座り、プルタップを開けビールを一口飲んだ。

急に隣に座られドキツとしたが、ビールを飲んでいる隼人を見て保護意識の方が勝ち

「あんたさ、いいかげん未成年なんだから飲酒はやめなよ」

隼人は未来を一瞥し、また一口ビールを飲んだ。

「未成年でも、飲みたい時もあるんだよ」

「なによ、その変な言い訳」

未来の言葉に気にする様子も無くビールを飲み続けている隼人を見て、未来は言う気が失せてしまった。

これ以上言った所で、毎日自室でビールを飲んでいるのを知っていたからだ。

しかし、いつも自室でビールを飲んでいる隼人が、今日に限ってなぜ未来と一緒に飲む気になったのだろうか。

未来と隼人が暮らし始めて一緒に飲んだのは今日で二度目だ。

一度目は未来が村木とのことがあつてやけ酒した時。

もしかして彼女と何かあつたのかな。

隼人が彼女と仲良くしている所は見たくないと思ったが、それでも何か隼人の役に立ちたいと思い、未来は思い切つて隼人に聞いてみた。

「彼女と何かあつたの？」

隼人は飲んでいたビールの手を止め、未来を見た。

「お前のせいで振られた」

「えっ！」

振られたって……。

「どうゆうことよ、しかもあたしのせいって……」

隼人は質問に答えようとはせず、未来をジッと見ている。

「なっ、何よ」

理解の出来ない隼人の行動に未来は戸惑った。

「慰めてよ」

「はあ？」

「お前が失恋した時、俺慰めてやったじゃん。今度は未来が慰めてよ」

そう言つて隼人は未来に近付いてきた。

未来は隼人が近付いてきた分、少し後退りした。

そりゃあたしが失恋した時、隼人は慰めてくれたけど……。

よく見ると隼人が飲んでいるビールは四本目に突入していた。

「隼人、あんたちよつと酔つてない？」

「この程度で酔う程、酒に弱くねえよ」

そう言つと隼人は未来を抱きしめた。

いきなり抱きしめられた未来は、隼人の力強い腕を振り解く事もできず、心臓が飛び出る程ドキドキしていた。

「は、離して……」

「やだね。未来のせいで振られたんだ。慰めてくれるまで離さない」

「だから、なんであたしのせいなのよ！ あたしが何したってゆうの？」

「俺に抱きしめられるのはイヤ？」

隼人は未来の質問に答えようとせず、少しだけ腕の力を緩め、未来の顔を覗き込むように聞いた。

隼人の顔がまじかに迫っていて、未来はますます心臓の音が高鳴り出す。

絶対酔っぱらってる。

いつもと違う隼人に未来は、必死に隼人の腕の中から逃げようとしていた。

でないと、心臓の高鳴りが隼人に聞こえてしまうのではないかと思えた。

それでも、隼人は容赦なく未来に迫ってくる。

「そんなに俺に抱きしめられるのは、イヤなの？」

真剣な眼差しで見つめられ、もはや未来は隼人から逃げる事が出来なくなってしまった。

「未来」

隼人は優しく未来の名前を呼ぶと、未来の頬にそつと手を添えた。

ああ、もうダメだ。

こんなに優しくされたら、隼人を好きだって気持ちが抑えられなくなる。

その時、隼人の唇がそつと未来の唇に被さった。

驚いて未来は隼人から離れようとしたが、隼人は腕に力を込め未来を離そうとしない。

隼人のとても優しいキスに、いつのまにか未来は抵抗する事を止めていた。

やっぱり、あたし隼人の事好きだ。

次第に深くなっていくキス。

そして、未来はソファの上に押し倒されていた。

そこで、ハッ和我に返る。

いくらなんでも、酔った勢いっていうのはイヤだ。

隼人だって振られたばかりで、きつとやけになってこんなことをしているに違いない。

このまま体を重ねたら、酔いが醒めたときつとお互い気まずい思い

をするだけだ。

そんな事だけは絶対避けたい。

「イヤ！」

未来は隼人の唇が離れたその時、精一杯の力を出し隼人の胸を押した。

一瞬、お互いの視線が合ったが、隼人は瞼を閉じ小さく溜息をつくと、隼人は未来の腕を引っぱり起こした。

「ごめん……」

そう言うと、隼人は立ち上がり自室へと戻っていった。

第13章：心の動揺

未来が仕事を終えて駅まで歩いていると、ポツポツを雨が降ってきた。

天気予報では雨が降るなって言っただけなのに。

降り始めた雨はだんだん大粒の雨になり、激しく降り始める。

傘を持っていなかった未来は、慌てて駅まで走り出した。

ここから駅まで走っても五分はかかるだろうな。

そんな事を考えていると、後ろの方から車のクラクションを鳴らす音が聞こえた。

未来より少し前の路肩に止まると、助手席の窓が開いた。

「相羽さん」

助手席から覗いた顔を確認すると、斉藤 敦会さいとうあつし社の社長だった。

「社長……」

昨年体調を崩した先代に代わり、三十歳という若さで会社社長に就いた。

会社を継ぐため大学を卒業した後、そのままこの会社に入社し、一から整備の仕事を勉強していた。

もともと整備の仕事が好きなのか、社長に就任したあと社長室に籠ることなく、常に現場で仕事をしている人だった。

いつも柔和な笑顔で柔らかな物腰の敦は、年下の未来にまでいつも丁寧な口調を崩す事がない。

「乗りなさい。家まで送りますよ」

未来は一瞬、どうしようか迷った。

元々敦はあまり喋る方ではない為、会社では挨拶を交す程度で、それ程親しいわけではない。

「早く乗りなさい。風邪をひきますよ」

段々激しくなる雨と敦の急かす言葉に、未来はおもいきって乗せてもらう事にした。

「すみません。社長」

未来は濡れた服をハンカチで拭きながら言った。

「かまいませんよ。どうせ、相羽さんの家の方へ用事があつて行く所でしたから。それと……、社長ではなく、出来れば名前で呼んでいただけませんか？」

名前で呼ぶって……。

未来が驚いていると

「社長といつても、ただの二代目です。それに、この歳で社長と言われるのは未だになれないものですから。出来れば、社外では名前で呼んでいただきたいんです」

未来はどうしていいのかわからず返答に困っている

「他の従業員の方にもそうお願いしているんですよ。もっとも、西田さんにいたっては未だに社内であつくんと呼ばれていますかね」

そう言うときステアリングを握る敦の顔が苦笑した。

西田さんは、あと2、3年で定年退職という年齢の現場一筋の人だ。

開業当時から勤めている西田にとっては、敦を小さい頃から知っている為、人前では社長と呼んでいるが、現場ではあつくんと呼ばれているのを耳にした事がある。

「わかりました。それじゃ、斉藤さんと呼びます」

「そうしていただけると、助かります」

敦はホッとしたように言った。

家に着くまでに未来は敦とたわいもない話をしていた。

家の前に車が着くと未来は車を降りて、敦の車が去って行くのを見送った後、家に入った。

意外としゃべりやすい人なんだな。

入社して二年と少しになるが、こんなに親しく敦と話したのは初めてだった。

やさしそうな印象があったものの、個人的にあまりしゃべることのなかった未来は敦に対して初めて親近感が湧いてきた。

リビングの扉を開け中に入ると、未来はドキツとしてその場に立ちつくしてしまった。

そこには、お風呂に入っただけののだろうか、上半身裸で首にタオルをかけ、冷蔵庫からビールを取り出している隼人だった。

部活はやっていないと聞いていたが、その引き締まった体に濡れた髪がなんともいえない程、艶やかに見え、しかも昨日のキスを思い出してしまい、未来の心臓の鼓動が早くなる。

「何、ボーと突っ立ってんだよ」

未来は隼人の言葉にハッと我に返った。

「あ、あんだねえ、いくら家の中とはいえ服ぐらい着なさいよ!」

いくら暖かくなってきたとはいえ、上半身裸で家の中を歩かれたのでは、心臓がいくらあっても足りないと思っただけ。

隼人はビールのプルトップを開け、一口飲むと未来に近づいてきた。

「いまさら、男の体見て驚くような歳じゃないだろ」

「そうゆう問題じゃないでしょ」

そりゃ、経験がないとは言わないけど、目の毒なのよ！

心臓に悪いのよ！

隼人は未来の目の前に来ると、面白そうに笑って

「お前、顔真つ赤だぞ」

誰のせいだと思ってんのよ！

未来は隼人を軽く睨むと、隼人はジッと未来を見つめた。

「な、何よ」

隼人にジッと見つめられ、隼人から見たら未来の態度はきつと挙動不審に見えただろう。

「とりあえず……、退いてくれない？」

え？

「お前が退かないと、部屋に戻れないから服も着れない」

隼人の言葉に未来は、自分がリビングの扉を塞いでいる事に気づいた。

「最近、暖かくなってきたから、俺はこのままでもいいけど」

ニヤリと笑う隼人から、未来は逃げるように横に退いた。

「お前って、面白い」

隼人は未来の横を通りすぎる時、未来の方を見てそう言うと、笑いながら自室へと戻っていった。

隼人の居なくなったりリビングで、未来は壁に背を預けると、そのまま床に座り込んだ。

からかわれた……。

なんなのよアイツは！

冷静を取り戻すにつれ、だんだん腹立たしく思えてきた。

もう、ヤダ！

こんなんでもこの先一緒に暮らしていけるんだろうか……。

未来はいろんな意味で、この先の生活に不安を覚えた。

第14章：一抹の不安

“Dwarfs”の休憩室で仕事を終えた隼人は、服を着替え火の点いていないタバコを咥えたまま椅子に座っていた。

ライターは中身が切れたのか、カチツと音はするものの火は点かず、しかたなく口寂しさだけの為にタバコを咥えている。

火の点いていないタバコを口先で弄びながら、昨日の夜の事を思い出していた。

お風呂上がりで、上着を着ないでいた隼人を見た時の未来のあの顔。

あの歳で男性経験がない訳でもないだろうに、真っ赤になりながら拳動不信な未来の態度は、今思い出しても可笑しくて笑いが込み上げてくる。

ホント、からかいがいのあるヤツ。

そして、そんな未来を見て可愛いと感じている自分を、隼人は素直に受け止めていた。

美香に指摘をされたあの日、お酒が入っていたとはいえ未来にキスをした、それが今の自分の素直な気持ちなのだとようやく気付いたのだ。

隼人は苦笑した。

いつのまに自分の気持ちの中の割合を、未来が占めるようになった

のか……。

「まだいたのか」

休憩室の扉が開き、隆が入ってきた。

「タバコ、吸わないのか？」

隆は椅子に座ると、火の点いていないタバコを咥えている隼人を見て言った。

「ライター切らしてしまつて」

隆は自分のタバコに火を点けると、隼人にライターを渡した。

「昨日、美香が来てたぞ。留学するそうだな」

「そうみたいですな」

「お前……、美香の事振つたんだつてな」

タバコに火を点けようとしていた隼人は、隆の言葉に思わず咥えていたタバコを落とした。

「いや……、振られたのは俺の方で……」

「あれはお前が振つたようなもんだよ」

隆はタバコを一口吸った。

「他に気になる女がいるんだろ。美香の方から言ったのは、あいつなりの優しさだ」

隼人は膝の上に落ちたタバコを拾い、火を点けた。

「あいつはいい女だったからな。お前が美香と付き合わないんだつたら、振るじゃなかったかな」

隼人は驚いて隆を見た。

「勘違いするなよ。お前為に美香と別れたんじゃないぜ。あいつはさ、俺となんかと付き合うより、もっと他にいい男がいるんじゃないかと思ってさ」

いろいろ女の噂が絶えない隆さんだけど、隆さんなりに美香さんのことを好きだったんだろうな。

「お前の気になる女って、例のお義姉さんの妹か？」

急に核心をつく話をされ、隼人は返答に困った。

「お前もわかりやすい性格してるよな。顔にそうですって書いてあるぜ」

隆はその場の雰囲気や人の心理を読むのに長けている。

そんな隆に隠し事は出来ないなと隼人は常々思っていた。

「一緒に住んでるんだし、いっそのことその場で押し倒しちまえよ」

ニヤツと笑いながら言っている隆は、本気なのか冗談なのかわからない。

「いや、それは……」

隼人は曖昧に言葉を濁した。

まさか、この前未来を押し倒して拒否られたとは言えない。

もし、わかった時にはどんなふうにかかわれる事が……。

「ま、あんまり近くにいと、逆に口説きづらくなるかもな。それに……、お前は素直じゃないからな」

隆は笑いながらタバコを灰皿に押し付けた。

それを言われると隼人は返す言葉がなかった。

「本気でお前がその子のことが好きなら、俺が一肌脱いでやるか」

「隆さん……？」

隆はそれだけを言うと、部屋を出ていった。

一肌って……。

あの人が何かする時っているんな人を巻き込むからな……。

隼人は一抹の不安が頭をよぎった。

第15章：番外編（前書き）

このシーンは元々物語の中に入れる予定のないものです。

ふと頭に浮かび、思いついたまま書いてしまいました。（^^;）

物語の流れは壊してはいないと思いますが、あくまでも番外編だと思っ
て読んでください。

第15章：番外編

―― 隼人視点 ――

とある土曜日の朝。

隼人はリビングでコーヒーを飲んでいた。

リビングの扉が開き、未来が入ってきたがいつもと様子が違う。

ずいぶん体をだるそうにしながらキッチンへと歩いていく。

そっぴい、昨日遅く帰ってきてたな。

二日酔いかとも思ったが、よく見ると顔が赤い。

冷蔵庫の中のお茶を取ろうとしている動作も、どうみても体調が悪そうだ。

「おい、大丈夫か？」

見兼ねて声をかけるが、しゃべるのもつらいのか返事は返ってこない。

隼人は心配になってキッチンへと行くと、未来は空になったグラスをシンクに置いたとたん、力が抜けたように倒れた。

「未来！」

隼人は慌てて未来の体を支えたが、その体はとても熱かった。

未来の額に手を当てると、明らかに熱がある。

「おい、未来！　大丈夫か？」

「ただの……、風邪だから……、寝てれば……、大丈夫……」

大丈夫と言うわりには、言葉を発するのもつらそうだ。

隼人は未来を抱き上げ、未来の部屋へと運んだ。

「夜遊びなんかしてるからだよ」

未来をベッドへ寝かせながら言ったが、いつもなら即返ってくる言葉すらない。

返ってこない返事に少し寂しさを覚えながらも、もう一度未来の額に手を当てる。

隼人は小さく溜息をつくと仕方なくリビングに降り、アイスノンや冷えピタ、お水と薬を持って未来の部屋へと戻った。

「未来、薬持ってきてやったから飲め」

未来の体を少し起こしてやり薬と水を飲ませた後、アイスノンを頭の下に、冷えピタを額に張ってやった。

まったく、世話の焼けるヤツだな。

未来の布団を掛け直してやると、隼人は部屋を出た。

隼人は昼になってから、未来の様子を見にドアをノックして扉を開ける。

「未来、昼飯食べれるか？」

声を掛けたが返事が無い。

隼人は未来の枕元まで行くと、薬がよく効いているのかまだ寝入っているようだ。

ベッドに寝ている未来の顔を上から見下ろすと、つらいのか少しだけ開いた口から息をしいる。

その姿が妙に色っぽく見えるのは気のせいだろうか……。

俺は……、何妙な気を起こしているんだ……、相手は病人だぞ……。

隼人は自分に言い聞かせたが、一度湧き上がった感情を抑える事ができず、未来の唇に自分の唇を重ねていた。

唇が離れると未来の瞼が少し開いたがそれは一瞬だけで、再び瞼を閉じてしまった。

隼人は自然と笑みがこぼれていた。

かわいいな。

そう思った隼人はもう一度唇を重ね、未来の部屋を出た。

―― 未来視点 ――

土曜日の朝、目が覚めると体がとてもだるい。

昨日、大学の友人達と遅くまで飲み歩いていたから二日酔いかとも思ったが、どうも熱があるような怠さだった。

そっぴや、ここ二三日喉が痛かったな。

未来は自室にある救急箱から体温計を取り出し、熱を測る。

ピピッと測り終えた電子音がして、確認すると三八度七分。

体温を確認すると自覚が出るためか、測る前より体が辛く感じてきた。

喉乾いた……。

一階のリビングまで行くのも辛かったが、水が自動的に自分の元へやってくるわけもなく、仕方なく未来はつらい体を引きずって、リビングへと行った。

リビングの扉を開けると、隼人がのんびりコーヒーを飲んでいる。

隼人の横を通り過ぎ、冷蔵庫を開けグラスにお茶を注ぐ。

「おい、大丈夫か？」

隼人の声が聞こえるが、返事をする気力さえ無い。

答えずにいる未来を不審に思ったのか、隼人がキッチンへとやってきた。

未来は飲み終えたグラスをシンクに置くと、体の辛さに限界が来て力が抜けるように倒れた。

このまま倒れたら頭打つかな、そんな事が頭に浮かんだが、いつこうに頭を打った様子が無い。

「未来！」

隼人の言葉に目を開けると、どうやら隼人の胸の中に倒れたようだった。

ああ、なんか隼人の胸の中って心地いいな。

それに、未来の額に乗せられた隼人の手が冷たくて気持ちがいい。

隼人の手って、大きくてあたし好きだ。

風邪を引いて体がだるいわりには、そんなことだけはしっかり感じていた。

「おい、未来！　大丈夫か？」

「ただの……、風邪だから……、寝てれば……、大丈夫……」

隼人に抱き上げられ、未来は部屋へと戻りベッドへと寝かせてくれた。

「夜遊びなんかしてるからだよ」

いつもなら隼人の嫌みに即言い返す未来だが、さすがに今日は言い返せなかった。

熱を見る為か、隼人がもう一度未来の額に手を添えた。

やっぱり隼人の手、気持ちいい。

このまま離れないで欲しい。

しかし、未来の気持ちも知らず隼人の手はすぐに離れていった。

隼人は一度未来の部屋を出ると、アイスノンや冷えピタ、お水と薬などを持って未来の部屋へと戻った。

「未来、薬持ってきてやったから飲め」

隼人に体を起こされ薬を飲むと、薬と水を飲ませた後アイスノンを頭の下に、冷えピタを額に張ってくれた。

隼人って普段口は悪いけど、こうゆうときは頼りになるヤツだな。

隼人が部屋を出ていくと、未来は眠りへと落ちていった。

薬がよく効いたのか未来は深く寝入っていたが、なぜか唇に暖かい

感触を感じ、少しだけ瞼を開けた。

隼人……？

薄らと開けた視線の先に隼人の顔があったような気がした。

まさか……ね……。

熱のせいで幻覚でも見えたかな。

未来は再び瞼を閉じると、もう一度唇に暖かさを感じた。

それはとても優しく心地よいものを感じ、未来は再び眠りに落ちていった。

第15章：番外編（後書き）

作者の気まぐれにお付き合いいただきまして、ありがとうございました。

次回は本編に戻ります。

第16章：新たな発見（前書き）

本編に戻りました。

第16章：新たな発見

未来は滅多にしない残業をしていた。

今日はいつも居る総務のお局様が急に体調を崩し休んだので、月末の決算をひとりで行っていた。

しかもこんな時に限って来客が多く、計算をしている手を何度も止める事になり、いつこうに作業が進まない。

電卓を叩いていると、総務部の部屋のドアが開き誰かが入ってきた。

未来は最後の数字を電卓に叩き込むと、手を止め部屋に入ってきた人物を確認すべく頭を上げた。

「珍しいですね、残業しているなんて」

総務部の部屋に入ってきたのは、敦だった。

「まだ、残業していくつもりですか？」

「いえ、ちょうど今キリがついた所です」

「そうですね、他の従業員は皆帰ったので、あとは相羽さんと僕だけですから一緒に出ましょう。施錠をしなければいけませんから」

そうだったんだ。

「すみません。すぐ片付けます」

未来は慌てて帰り仕度をした。

「頑張つて仕事してもらっているのに、謝る必要はありませんよ」

敦は優しい笑顔を未来に向け言った。

「慌てなくてもいいですから、仕度が出来たら声をかけてください。
僕は戸締まりの確認をしてきます」

そう言う敦は総務の部屋を出て行った。

未来は帰り仕度を終えた頃、ちょうど敦が総務の部屋に戻って来た。

「この部屋の戸締まりは全て確認しました」

未来がそう言うのと、敦と未来は会社を出た。

敦は玄関の施錠と警備の機械をセットをすると未来の方を振り返り

「良かったら、食事でもどうですか？」

突然の申し出に未来は戸惑った。

雨の降った日に家まで送ってもらったとはいえ、ふたりで食事となると……。

未来が返答に困っていると、申し訳なさそうな声が聞えた。

「急に食事なんか誘って、……」と迷惑ですよね。すみません……」

その姿はまるで母親に叱られた子供のように見え、とても年上には見えず未来は思わず笑ってしまった。

急に笑い出した未来に敦は不思議そうに未来を見ている。

「すみません。社長の謝っている姿が、まるで叱られた子供のように見えたものですから」

「叱られた子供……ですか……」

敦は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「お食事、連れてっていただけるんですか？」

「一緒に行ってもらえるんですか？」

未来の言葉に敦はホツとしたように笑顔になった。

今日、隼人は夕食はいらないと言っていたから、コンビニでお弁当を買って食べるつもりだったのだ。

未来の敦の車に乗り込んだ。

着いた場所は居酒屋だった。

「すみません。こうゆうお店しか知らないものですから、と言っても車なので飲めませんが……。相羽さんは何か飲まれますか？」

「いえ、ウーロン茶で」

敦はウーロン茶と何品か注文してくれた。

「すみません。無理に誘ってしまつて」

敦は運ばれてきたウーロン茶を一口飲むと、優しく未来に笑いかけた。

「いえ、家に帰つても特にすることありませんから」

年上の、しかも会社の社長に敬語で話しかけられ、未来はかしこまつてしまう。

なんで社長は年下のあたしにまで敬語で話すんだろう。

「相羽さんはいつも明るいから、うちにみえるお客様に評判いいんですよ」

「そうなんですか？」

こんな所で褒められるとは思っていなかった未来は照れて下を向いた。

「友達にはよく、無駄に明るいつて言われるんですけど」

「そうですか。でも、僕は相羽さんの明るさは好きですよ」

「えっ？」

敦の思いがけない言葉に未来は顔を上げた。

「あつ、いえ、変な意味ではなく……」

敦は慌てて顔の前で手を振る。

「相羽さんがいるとその……、周りが明るくなるっていうか……、うちの会社は若い方がいませんから」

そして、また困ったように頭を掻いていた。

それを見ていた未来はまた笑ってしまった。

三十歳という年齢には似つかわしくないその態度に、未来はとても好感を持った。

「また、笑われてしまいましたね」

敦は照れたように笑っている。

「社長、じゃなかった。斉藤さんって面白い方ですね。あの……、斉藤さんはどうして、あたしにまで丁寧にしゃべられるんですか？」

敦に親しみを感じた未来は、いつも疑問に思っていた事を聞いた。

敦はフツと笑うと

「それは、僕が二代目だからです」

未来は敦の言っている意味がわからず首を傾げてた。

「年齢や経歴では長年勤めている方には敵わない。僕が父の会社を継いで社長になったとたん、横柄な態度をとったら周りの従業員はどう思うでしょうね」

あつ、そっか。

敦の言葉にようやく納得した。

「年下のしかも経歴の短い僕の下でベテランの方に気持ち良く働いてもらおうと思ったら、僕が下手に出るのが一番いいですよ」

「でも、あたしは斉藤さんより年下ですし……」

「従業員を分け隔てなく接する事が出来なければ、上に立つものとして失格だと思いませんか」

「そんなもの……、ですか……」

「そんなものですよ」

きつと、上の立場の敦には、未来にはわからない苦労があるのだろう。

未来と敦はグラスに残っていたウーロン茶を飲み干し、店を後にした。

「相羽さんは、付き合っている方はいないんですか？」

敦は未来の家の近くの信号で止まった時、思い出したように言った。

「最近、別れちゃいました」

あまり思い出したくない思い出だったが、明るく言ったつもりだったが

「そうでしたか。余計な事を聞いてしまいましたね」

「いえ、もう終わった事ですから」

再び動き出した車のステアリングを握っている敦の横顔が、申し訳なさそうなり未来は慌てて言葉を付け足す。

しばらくして家の前に車が着くと

「今日は食事に付き合わせてすみませんでした」

「いえ、こちらこそご馳走さまでした」

「ご迷惑でなければ、また、食事に誘ってもいいですか？」

「あつ、はい。あたしなんかでよければ」

ただ会社で会うだけの印象より、今日一緒に食事をして敦への印象は変わっていた。

そして、敦とならまた一緒に食事をしてみたいなと思った。

「じゃ、また」

「はい、お休みなさい」

第17章：三者面談

未来は午後からの仕事を休んで、隼人の学校に来ていた。

少し前に隼人から、保護者を交えた三者面談があるから来てほしいと、言われていたのだ。

普段の隼人を見ると、大人びていてあまり意識したことはなかったのだが、こうして学校に来ると改めて高校生なんだと思った。

「余計な事は言わなくていいからな。ただ黙って返事すればいいから」

何を警戒しているのか、学校に着くまでの間何回この言葉を聞かされただろうか。

きっと学校でもいい子にしているのだろう。

家での事はよっぽど言われたくないんだろうな。

「そんなに言うなら、家でももう少しいい子ちゃんにすれば」

からかうように言うと隼人はムツとして

「いい子をやってんのも疲れるんだよ。家に帰ってまでやってられっか」

隼人の本来の性格を知っている人って、一体どれくらいいるんだろう。

きっと外では誰にでもいい子でいるんだろうな。

そう思うと、なんだか自分だけが隼人の事を知っているような幸せを感じてしまった。

隼人の名前が呼ばれ、教室に入り担任と対面になっている席に隼人と座った。

担任の男性教諭は五十を過ぎているだろうか、頭には黒髪よりも白髪の方が目立っている。

「えーと、あなたが隼人君の保護者ですか？」

若い未来と一緒に来た事に、男性教諭は少し驚いているようだった。

「ええ、海外赴任した兄夫婦の代わりに、隼人の保護者を頼まれています」

男性教諭は思い出したかのように、ああと呟いた。

「隼人君はK大受験希望でよかったかな」

「はい」

K大……。

そんなにレベルの高い大学を受けるんだ。

K大と言えば県内でも難関と言われる国立大学だ。

「他の大学は受けないのか？」

「受けるつもりはありません」

ハッキリと言い切った隼人に、男性教諭は少し考えていたが

「まあ、君なら合格圏に入っているから大丈夫だとは思うが……。一応滑り止めは必要だと思うがね。どうだろう、T大も受けてみては」

T大はK大よりは偏差値が低いが、それでも簡単に受かる事はできない私立の大学だ。

「いえ、T大は受けるつもりはありません。K大一本でいきます」

「まあ、まだ時間はある。ゆっくり考えなさい」

三者面談が終わり、校内の廊下を歩いていた。

「隼人」

後ろから声がして振り向くと、ストレートの長い髪をなびかせながら、ひとりの女生徒がこちらに向かって歩いてきた。

「優香」

優香と呼ばれた女生徒は隼人に近づくと

「昨日はありがとうね」

「ああ、うまくいったのか？」

「うん。隼人のおかげだよ」

優香は照れたようにでも、とても嬉しそうに言った。

同級生だからか、隼人はとても気楽な感じで話をしている。

誰だろう……。

綺麗な子だな。

目鼻立ちのハッキリとした顔立ちの優香は、身長はそれほど高くはないが、隼人と並ぶと美男美女のカップルに見えた。

そういえば昨日の日曜、隼人は出かけていたけどこの子と一緒にいたんだ。

もしかして……、新しい彼女だったりして……。

そんなふたりを見て、未来は優香に嫉妬している自分がいる。

未来は心の中で溜息をついた。

あたしはなにを嫉妬しているんだろう。

第18章：喧嘩

未来と隼人は学校近くのコインパーキングに停めた車に乗込んだ。

隼人の兄、大輔が海外赴任している間、必要なら車を使ってもいいと言われていたので、今日は車で来ていた。

「本当にK大一本でいくの？」

未来は車の運転をしながら聞いた。

「K大以外、受ける気はないよ」

「T大も受けといた方がいいんじゃない？ 一応万が一ってこともあるわけだし……」

隼人はしばらく黙って窓の外を見ていたが

「大学を四年間通えば、いったいいくら金がかかると思ってたんだよ」

思ってもみない方向の話が出て、信号待ちをしていた未来は振り返った。

「国立ならまだしも、私立にいけばその分余分に金がかかる」

「そりゃまあ、そうだけど……」

「しかもT大は県外。通うとなると大学の近くにアパートを借りな

いといけなくなる。K大なら国立だし、家からも通える。あまり…、兄貴に金の負担をかけさせたくないからな」

意外な言葉を聞いて未来は驚いた。

両親を亡くしてから、親代わりに隼人を育てたのは兄の大輔だった。

ただでさえ、大学はお金がかかる。

確かに私立に入学して、アパートを借りるとなるとかなりの金額が必要になるだろう。

「それなら、一度大輔さんに相談してみたら……」

金銭的な事はそれぞれの家庭事情があるだろうから、あまり突っ込んだ事は言えないけど、もしやりたい事があるなら諦めて欲しくないという気持ちもあった。

「前」

信号が青になり、それに気がつかなかった未来を促すように隼人が言った。

未来はステアリングを握り直し、車を発進させる。

再び黙ってしまった隼人だったが

「俺と兄貴は血が繋がってないんだ」

衝撃的な言葉に未来は隼人を振り返った。

えっ？

今なんて……。

「ちゃんと前見て運転しろよ」

隼人に注意され、未来は慌てて前を見た。

「俺が五歳の時に、母親が兄貴の父親と再婚したんだ」

そうだったんだ……。

「本当なら、俺の面倒なんか兄貴がみる必要なんてないんだ」

前を向いて運転している未来には、横を向きながら窓の外を眺めている隼人の顔は見えないが、その声には少しの寂しさが感じ取れるのは決して気のせいじゃないと思った。

きっと、両親が亡くなった為に自分の面倒をみている大輔に、金銭的に負担になりたくないんだ。

ふと未来は脳裏に、大輔が言っていた言葉を思い出した。

『小学校まではとてもやんちゃなヤツだったんだけど、いつの頃から妙に聞き分けが良くなって……』

未来はなんとなく、隼人の今までの行動に納得がいった。

外面がいいのも、きっと大輔に迷惑がかかるようなことがないよう

にしているのだろう。

未来は隼人の意外な一面を見た気がした。

でも、本当にそれでいいんだろうか……。

血が繋がっていないからとか、両親がいないからとか、そりゃあたしには血の繋がった姉さんもいるし、両親も健在だから大きな事は言えないけど……。

「ホントに、それでいいの？」

未来の問い掛けに隼人は何も言わず、ただ窓の外を眺めている。

「もしあたしが大輔さんなら、あんたのその考えを聞かされたらシヨククだな」

未来の言葉に隼人がこちらを見たのが気配でわかった。

「少なくとも十年以上兄弟やってきたんでしょ。もしあんたの事を大輔さんが負担思っているなら、両親が亡くなった時にあんたを施設にでも預けてるよ。兄弟って血の繋がりだけがすべてじゃないと思し、少なくとも大輔さんはあんたの事を大切に思ってると思うよ。でなきゃ、海外赴任が決まった時にあたしを同居させたりしないでしょ。相手に何も聞かないまま勝手に思い込んで結論を出すのは絶対良くない。だから、一度大輔さんに相談してみなよ。それでもお金の事が心配なら、出世払いとでも考えたらいいんじゃない？ あんたが社会人になってドーンと稼いで、大輔さんに恩返しすればいいじゃん」

「お前って……、馬鹿みたいに前向きな性格してるな」

「馬鹿ってなによ！」

隼人の呆れたように言ったその言葉に、ムツとして未来は隼人の方を見た。

しかし、隼人の顔は言葉とは対照的に、今まで見たことない優しい笑顔を未来に向けていて、その笑顔があまりに魅力的に見え未来は慌てて前を向いた。

そのまま黙ってしまった隼人に、自分の鼓動が高鳴り出しているのに気付かれているんじゃないかと心配した未来は、何か喋らなきゃと思い咄嗟に思い付いた事を口に出していた。

「そ、そういえばさっき隼人と一緒に居た子、綺麗な子だったね」

咄嗟に思い付いたとはいえ、出す話題を間違えたと一瞬後悔した。

「ああ、アイツ、よく街でスカウトとかされてるみたいだからな」

隼人の言葉が、少しだけ優しく聞こえるのは気のせいだろうか……。

「優香と付き合いたってヤツ、けっこういるみたいだし」

いつもはすぐに会話が途切れるのに、さっきの彼女の事をよく喋る隼人に未来はいいようなない気持ちになった。

それは勝手な感情だと分かっていたが、つい言ってしまった。

「へえ、じゃあんたもそう思っている内のひとりなんだ」

言ってしまったから後悔したが、出てしまった言葉を取り消す事も出来ず、隼人は何を言っているんだといった感じだった。

「なんだよ……、それ」

「あんたにしては珍しく愛想振りまかず普通だったじゃん。それにあの子、あんたの事振った子に似てるなって思ったからさ」

ああ、こんな事言いたい訳じゃないのに……。

自分の言動に自己嫌悪に陥りながらも、未来は自分自身に驚いていた。

あたしってこんなに嫉妬するタイプだったんだ。

隼人の様子を伺うと明らかに不機嫌そうにしている。

「そつゆっお前はとうなんだよ」

えっ、あたし？

「最近、また別の男に送ってもらってるみたいじゃん」

もしかして、社長の事を言ってるんだろうか。

「また、つまない男に引っ掛かってんじゃないの。お前、男見る目ないからな」

「あの人はそんな人じゃないわよ」

隼人の嫌みな言い方にムツとした未来はきつく言い返した。

少なくとも社長とは恋愛関係があるわけではないし、なによりとても紳士的に接してくれている敦の事を悪く言われなくなかった。

「あの人ねえ」

隼人は小馬鹿にしたように言った。

「ずいぶんムキになってんじゃない」

「あんたが嫌みな言い方するからでしょ」

「だって本当の事だろ」

「本当の事って、あんたにあの人の何がわかんよ。何も知らないくせに」

「……ずいぶんと庇うんだな。……その男の事本気で好きなの？
それとも……、もう寝たとか」

「なんで、すぐに寝たとかそうゆう話になるのよ」

ちょうど、信号で止まった未来は隼人の方を振りかえると、隼人は真剣な顔でジッとこちらを見ていた。

その顔は少し辛そうに見えた。

なんで、あんたがそんな顔するのよ。

まるで、自分が悪い事してるみたいな気分になる。

お互いの目線が合ったまま未来と隼人は黙っていたが、最初に目を逸らしたのは隼人だった。

「俺、今日夕飯いらないから」

そして隼人は助手席のドアに手をかけ、車の外へと出て行った。

それを黙って見送っていた未来は、悔恨の念にとらわれた。

信号が青に変わったのか、後ろの車にクラクションを鳴らされ、未来は仕方なく車を発進させた。

第19章：後悔

未来は会社のロッカーをパタンと閉めた後、額をロッカーの扉につけ溜息をついた。

隼人とケンカして一週間、あれ以来隼人は明らかに未来を避けている。

なんであんな事言ってしまったんだろう。

自分の幼稚な嫉妬のせいで、ケンカしてしまった事を心底後悔していた。

謝ろうかとも思ったが、ずっと避けられていては話すきっかけすら掴めない。

同じ家に住んでいてこの状態はかなりキツいな。

未来はもう一度溜息をつく、更衣室を出た。

足取りも重く玄関の扉を開けると、何かにぶつかった。

「痛っ！」

「大丈夫？」

ぶつけた額を手に当てながら、声の主を確認すると敦だった。

「すっ、すみません！」

慌てて未来が頭を下げて謝ると

「いや、僕のほうこそちゃんと見てなかったから、そんなに謝らなくてもいいですよ。頭を上げてください」

未来が顔を上げると敦がジッと未来の顔を見た。

「な、なんでしょう」

「赤くなってるね」

えっ？

「額」

敦の言葉に未来は両手で額を隠した。

「……大丈夫ですから」

未来のその行動を見て敦はクスッと笑った。

「お詫びに食事でも奢るよ」

「え、いや、そんな。ぼーっとしてたあたしが悪いんですから」

「だからですよ」

敦の言っている意味がわからず何度か瞬きをしていると

「最近、元気がないように見たので。そうゆう時は飲みに出るのが一番でしょ」

敦はニツコリ笑うと、未来の腕を掴み歩き出した。

未来は突然の事で敦のされるがまま、タクシーと一緒に乗り込み前に一度行った居酒屋で飲む事になってしまった。

どうせ家に帰っても隼人と気まずい雰囲気の中いなければいけないのだ。

未来は開き直って、ビールを飲み始めた。

飲み始めると今までのストレスからか、一気に生ビールのグラスを二杯空けた。

それを見ていた敦はかなり驚いていたが、飲み始めた勢いもあり、目の前にいる人が会社の社長だということすらすっかり頭から消えていた。

「相羽さんって……、お酒強かったんですね」

「ええ、うちの家系はみんなお酒に強いんです。おかげで酔いたくてもちつとも酔えなくて……」

「よほど何か嫌な事があったようですね」

敦は苦笑している。

「ホント最悪です。こうゆうのを身から出たサビって言うんでしょ

うね」

「まあ、何があったかは知りませんが、今日はトコトン付合ってあげましょう。額のお詫びも兼ねて」

未来は敦を見ると、優しく微笑んでいた。

こうゆう人を大人の人って言うんだろうな。

斉藤さんがあたしの好きな人だったら、あんな子供ばいやきもちななんてなくて済んだのかな。

やだ……、あたし何考えているんだろう。

隼人と斉藤さんを比べるなんて……。

居酒屋で食事を終え店を出ると

「まだ時間があるなら、もう一件行きましょう」

時計を見るとまだ九時過ぎだった。

この時間ならまだ帰らなければいけない時間ではない。

「連れてっていただけませんか？」

「今日は知り合いがやっている店でパーティがあつて、僕一人ではどうしようかと思っていた所だったから、一緒に行ってもらえると助かるよ」

敦と一緒に向かった店は、先ほどの居酒屋から二十分程歩いた所にあった。

お店の扉を開けて店内に入ると、未来は敦に促されるようにカウンター席に座った。

カウンターから店内を見渡すと従業員は男性しかいないからか、客席には九割がたが女性客だった。

「今日は何のパーティなんですか？」

「俺の誕生日パーティなんだ」

敦にした質問だったが、その返答をしたのはカウンター内側にいる男性だった。

「いらっしやいませ、ようこそDwarfsへ。俺、隆って言います」

満面の営業スマイルで隆は挨拶をした。

「隆、彼女に何か作ってやって」

「敦さんはどうします？」

「ああ、いつものでいいよ」

隆の言葉に敦は別の場所に行き何か作り始めた。

「隆とは長年の腐れ縁だね。今日は隆の誕生日パーティを店でやる

から来てほしって言われてたんですが、やっぱり……、相羽さんに一緒に来てもらって正解でした」

敦は店内を見渡しながら言った。

未来ももう一度店内を見渡した。

確かに来店客のほとんどが女性では、男性は入りづらいかもしれない。

「お待たせ、俺のスペシャルカクテルをどうぞ。で、敦さんはいつものね」

「美味しい」

未来はカクテルを手に取り一口飲むと、フルーティな香りが口いっぱいに広がり、とてもおいしかった。

「そう良かった。それ、俺の自信作だから」

隆は嬉しそうに言った。

その気さくな笑顔はとても魅力的で、誕生会に沢山女性客が来ているのが頷ける気がした。

「そうだ、ケーキあるけど食べる？」

「えっ、いいんですか？」

未来はケーキと聞いてつい顔がほころんだ。

敦は裏方に行くと誰かと話をしてから、また戻ってきた。

「ちょっと待っててね。今持って来てくれるから」

未来は楽しみにしながら待っていると、カウンターの内側から名前を呼ばれ、声のする方を見ると

「隼人……」

裏方から出て来た隼人は、ケーキのお皿を持ったままその場に立ち尽くして、驚いたように未来を見ている。

「なに、お前知り合いなの？」

その様子を見ていた隆が隼人に聞いた。

「え……、お義姉さんの妹で……」

「ああ、お前が同居している子って、この子なんだ」

隼人が言い終わる前に隆が言葉を繋いだ。

「同居？」

敦は隆の言葉を聞いて、未来の方を見た。

未来は敦に隼人との同居の経緯を説明すると、敦は納得したかのよう
うに隼人を見た。

隼人は敦を一瞥し、ケーキの皿を未来の前に置くと、一瞬未来と目を合わせそのまま奥へと踵を返した。

その顔は明らかに怒っている。

最悪だ……。

この前、斉藤さんの事で言い合ったのに、その原因になった人と一緒にいるんじゃ、そりゃ怒りもするか……。

いや、待てよ。

そもそもあたしと斉藤さんとは付合っていないんだから、隼人に怒られる必要はないじゃない。

だいたい、あたしが誰と付合おうが隼人には関係ない事だし。

そう思うと今度はだんだん腹が立ってきた。

未来は目の前に出されたケーキにホークを思いつき突刺して食べ始め、お酒のピッチも早くなる。

その様子を見ていた敦がクスクス笑い始めた。

不思議に思い未来は敦を見た。

「相羽さんはわかりやすい性格をしていますね」

敦の言っている意味がわからない未来は首を傾げた。

しかし、それ以上言うつもりがないのかただ黙って笑っていた。

「そうだ、未来ちゃんって言っただけ、最近隼人って何かあったの？」

「え……、どうしてですか？」

未来は驚いて隆を見た。

「最近の隼人、機嫌悪いんだよね」

未来は黙って下を向いた。

まさか、その原因のひとつが敦だとは口が裂けても言えなかった。

「さ、さあ……。……。あの、お手洗いお借りします」

未来はいたたまれなくなつて、席を立った。

未来がレストルームから帰つて来ると、耳元で話をしなければいけないほどざわついている訳でもないのに、敦と隆はなにやらコソコソと話をしているようだった。

未来が席に戻ると、慌てた様子で離れた。

「そろそろ帰りましょうか」

敦の言葉に時計を見ると、まだ十時を少し過ぎた所だ。

「でも、まだ来てそんなに時間経ってないですよ。いいんですか？」

「大丈夫ですよ。一応義理は果たしましたから」

ニツコリ笑う敦を不信に思いながらも、残り少なくなっていたカクテルを飲み干し、店を後にした。

第20章：キューピッド

Dwarfsの休憩室、十時を過ぎ、仕事の終わった隼人は何本目のタバコを吸っていた。

本来ならリラックス出来るはずのタバコも、一向にイラつきを取り除く事が出来ないでいる。

なんなんだよ、アイツは！

未来は本気であの男の事が好きなのか。

あの男の横で楽しそうに笑っていた未来の顔が隼人の脳裏に焼き付いて離れない。

隼人は吸っていたタバコを灰皿に押し付けると、休憩室の扉が開き隆が入って来た。

「お疲れ」

「お疲れっす」

「なんだ、なんだ。シケた面してんな」

隼人はまたタバコの箱を手に取り、一本引き抜いた。

「お前の不機嫌の原因は……、あの未来ちゃんって子だろ？」

隆はからかうように隼人に言った。

「さつき敦さんと一緒に帰ったぜ。いいのか、あのままふたりで帰しても」

「俺には関係ないですから」

隼人はタバコ吸いながら、隆がいる方とは反対の方を向いた。

「その言葉、いつまで言っていてられるかな」

隆はニヤリと笑っている。

「敦さんって女に手出すの、俺より早いぜ」

隼人は眉の上がピクリと動いた。

「しかも飽きるとバツサリ切るからな。一体何人の女が敦さんに泣かされたことか」

隆は可哀想にといった態度をとった。

隼人の手にあるタバコは、まもなく吸われる事なくその役目を終えようとしている。

「今日勝負かけるって言ってたぜ。可哀相に未来ちゃんも遊ばれて捨てられる運命か」

隼人は手に持っていたタバコの灰皿に押し付けると、隆の言葉を最後まで聞くことなく部屋を飛び出していた。

あの馬鹿！

またダメされやがって！

隼人は夜の繁華街を全速力で走った。

隼人は思いつく限りの場所を探したが、なかなか見付けられない。

一体何処に行ったんだ。

肩で息をしながら立ち止まって辺りを見渡すと、見慣れた背中が見えた。

いた！

人の波をかき分けながら近づいていく。

「未来！」

突然名前を呼ばれ、未来は驚いた顔で後ろを振り返った。

隼人は未来と一緒に振り返った敦の胸倉を両手で掴む。

「隼人！ あんた何やってんのよ！」

敦は一瞬顔を歪めたが、次の瞬間には隼人の両腕を掴んだ。

痛って！

敦は腕を軽く掴んでいるようにしか見えないのに、だんだん隼人は

腕の痺れを感じ徐々に掴んだ両手を離した。

「腕のココのツボを押すと腕がしびれて手に力が入らなくなるんですよ。こうみえても護身用に武術を習っていたものでね」

敦は不適に笑い、隼人の手が完全に離れると敦は手を離した。

「すみません、斉藤さん。大丈夫ですか？」

隼人の手が離れると、未来は敦に頭を下げ謝った。

「なんでお前が謝ってたんだよ！」

「あんたが失礼な事をしたからでしょう！」

「お前が謝る必要なんかねえよ！」

「だったらあんたが謝りなさいよ！」

「まあまあ……」

睨みながら言い合うふたりを敦がなだめた。

「ホントに、すみません」

再び未来が謝った。

「だから、お前が謝る必要ないって言ってたんだろ！」

「相羽さん、僕なら大丈夫です。それより隼人君の方がまだ腕痺れ

てるんじゃないかな。大丈夫？」

敦の言葉に隼人が睨んだ。

「隆が何を言ったのかはだいたい想像がつくけど、キューピッド役を頼まれて暴力を振るわれたんじゃないや割に合わないのね」

敦は苦笑している。

は？

キューピッド役……？

何言ってるんだ、コイツ……。

「まだ、気づかない？ 隆にはめられたんだよ」

隆さんに……？

その時、隼人の脳裏に隆の言葉が思い出された。

『俺が一肌脱いでやるか』

まさか……。

「もっとも、君が来ないようなら、本気で口説くつもりだったんだが……、相羽さん、ナイト君が駆けつけてくれたようだから、今日は彼と一緒に帰りなさい」

敦は未来の方に向き直って言った。

未来は敦の言葉の意味を理解出来ずに、困惑した顔をしている。

「今日の所は隆の顔を立てて君に譲るが、これからは遠慮しないよ」

敦は隼人の側まで来ると、それだけを言ってその場を去って行った。

まさか、隆さんが一枚かんでいるとは……。

今思うと、確かに休憩室でかなり煽られたような気がする……。

でも、最後に言っただあの言葉。

『これからは遠慮しないよ』

アイツ、ただ隆さんに頼まれたっただけじゃないよな。

「ちょっと！ 一体どうなってんの！ 説明しなさいよ！」

今の状況がまったく理解出来ていない未来が隼人の横でわめいている。

「帰るぞ！」

隼人は未来を一瞥すると、腕と取り歩き出した。

第20章：キューピッド（後書き）

ここまで読んでいただきまして、ありがとうございます。
次回が最後の更新になります。

3月13日を予定しております。

第21章：ふたりの想い

「隼人！ いい加減どうゆう事が説明しなさいよ！」

未来は家のリビングで、持っていたバッグをソファに置くと、隼人を問詰めた。

隼人に腕を掴まれタクシーに乗って帰って来たが、タクシーの中で隼人は未来の質問には一切答える事なく黙ったままだった。

今も未来を無視して、冷蔵庫から取り出したミネラルウォーターを取り出し飲んでいる。

「隼人！」

今までなら、嫌みを言いながらも一言二言は返ってくるのに……。

なかなか答えようとしない隼人の態度に、未来は呆れ始めていた。

未来が溜息をつく

「いい加減気付けよ。この鈍感女！」

持っていたミネラルウォーターをテーブルに置くと、隼人は未来に近付き睨んでいる。

「あたしの何処が鈍感女なのよ！」

未来は隼人を睨み返した。

すると、隼人は大きく溜息をついた。

「もういい。ハッキリ言わないとわからないそうする」

隼人をジッと未来を見たかと思うとゆっくりと近付いて来た。

「な、何？」

そのいつもと違う様子に未来は、隼人が近付いた分だけ後退るが、隼人腕を掴まれたその瞬間、隼人に抱きしめられていた。

何が起こったのかわからず、未来は隼人に抱きしめられたまま、抵抗することすら忘れていた。

いやそれどころか、隼人鼓動が直接未来の耳に聞こえてきて、未来は自分の心臓が高鳴り出しているのを感じた。

「心配……したんだ……。お前がアイツに騙されてるんじゃないかって……」

ああ、そうか。

村木さんの事があったから、隼人なりに心配してくれていたんだ。

「斉藤さんの事なら隼人が心配するような人じゃないから、だから……」

隼人は腕の力を緩めると、未来の顔を覗き込むように見た。

あまりに隼人の顔が近づけてきた為、未来は最後まで言う事が出来なかった。

「ここまで言ってもまだわかんない？ お前ってホント超鈍感女だな」

「……………？」

「心配したのは……、お前の事が好きだからだよ」

えっ…………？

今、なんて言った…………？

未来は予想外の言葉を聞いて、一瞬誰の事を言っているのかわからなかった。

「お前がアイツと付き合うんじゃないかと思ったら、とてもじゃないけど冷静でいられなかった」

まさか…………、隼人が…………、あたしの事…………、好き…………？

未来はまるで外国語を聞いている気分だった。

「だって、あの日曜に会ってた女の子は…………」

「優香が付き合っているのは、俺の親友の木戸だよ。木戸の誕生日に告白したいから、プレゼントと一緒に選んで欲しいって頼まれてあの日一緒にいたんだ」

そう……、だつたんだ……。

隼人が未来の左頬に隼人の手が包むように触れた。

その瞬間に心臓がうるさいぐらい高鳴り、絡まった隼人との視線を外す事が出来ない。

そして、目の前が暗くなったと同時に唇に暖かい体温が伝わり、隼人の唇が重なった事がわかった。

軽く重なった唇が少し離れると、角度を変えもう一度重なり、舌で未来の唇を押し広げ深いキスと落としていく。

唇が離れると隼人はもう一度未来を抱きしめた。

「あんな男、やめておけよ」

ん？

あれ？

もしかして隼人はあたしが斉藤さんの事好きだと思ってない？

そう思っただけなんだか可笑しくなってきた。

「何、笑ってんだよ」

未来の笑いに隼人は不機嫌そうに言った。

「だって……、人の事鈍感とか言っておきながら、自分だってそう

じゃない」

未来は隼人の胸から顔を上げ、隼人を見た。

「鈍感なヤツに鈍感だなんて言われたくない」

まだクスクスと笑っている未来を、ムツとした様子で隼人は見下ろしている。

その様子がなんだか拗ねている子供のようにかわいかった。

隼人って大人っぽく見えるけど、ホントはすごく子供っぽいのかも
しれない。

「好きだよ、隼人」

未来は、少し背伸びをしてそつと隼人の唇にキスをした。

- - 完 - -

第21章：ふたりの想い（後書き）

最後までご愛読していただきまして、ありがとうございました。
楽しんでいただけましたでしょうか？

小説を書き始めてまだ2作品目ということもあり、まだまだ勉強すべき点も多く、読者の皆様には最後まで読んでいただけた事を、本当にうれしく思っております。

次回作はまだ考えておりませんが、また皆様とお会いできれば幸いです。

花桃

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6047d/>

ひとつ屋根の下

2010年10月20日12時59分発行